



野良猫 「かあさん」

戸田 博子

去年のお盆も終わる夜のことでした。我が家の裏口のドアに何か擦り寄る音がしました。食事をしていて私と母は、2人で顔を見合わせました。なぜかならそれは長年、外ネコの「かあさん」(勝手に呼んでいたが〜)が、食事に来たよという合図なのです。

「かあさん」は、4年にわたり子猫を産み、我が家のドアに来て鳴き、ご飯をもらっていたネコだったのです。4年目には私が捕獲して、獣医さんで避妊手術をしてもらいました。4年の間に連れてきた子猫は6匹。しかし、1年足らずでみんな姿を消してしまうのです。

ネコをよく知る人によると、具合が悪くなったり事故に遭ったりと、野良猫は10匹に1匹しか育たないそうです。

子猫がいなくなっても、「かあさん」は定期的に朝・晩とご飯を食べにきました。ドアに擦り寄り、遠慮がちに「ニャア、ニャア」と鳴きます。野良なので警戒心が強く、私が見ているとご飯を食べません。いつもご飯を出すとすぐドアを閉めて耳を澄まします、かすかに「カプ、カプ」と食べる音が聞こえて安心する、そんな関係のネコでした。

一般的に野良猫に「エサはやるな!」といわれますが、我が家では「かあさん」以外に、20年以上にわたって、庭に現れた猫にご飯をやり続け、雌には避妊手術をしてやりました。

言い訳がましくなりますが、野良猫だけでなく、実際に家でも3匹のネコと数匹の犬も飼いました。全てペットショップから連れてきたのではなく、縁あって我が家の庭や裏の公園に現れた動物たちです。

よく、猫は死ぬときは、どこかに行ってしまう、姿を残さないといわれますが、姿を消した子猫を除いて6匹が、庭で最後を迎え、木の下に埋めています。

ところが10年通ってきた「かあさん」は、去

年の1月に来なくなりました。外の猫としては寿命かとも思い、どこかに倒れていないかと捜しましたが、見つけることはできませんでした。

私の母は「かあさん」だけ看取ってやれなくて残念だったと、しばらく悲しい思いをしていました。

あの夜、裏口のドアで、その「かあさん」とも思える音がしたのです。窓から静かにのぞきましたが、何もいません。その時は、ほかの猫が通りすぎたのだらうと、自分の気持ちを納得させました。

「ちがう!」

あれは「かあさん」がお盆のあいさつに来て

「ごめんね。黙って逝ってしまっ

とあいさつに来たのだ!

私は超常現象は信じないタイプの人ですが、ならやまの木や植物、昆虫、鳥などの生き死にを観ているから、こんな気持ちにさせられたのかと思いました。

今は、自分の寿命の残りを考えると、無責任に動物を飼ったり、エサをやったりできなくなりました。

人間の見えないところで頑張っている、イタチやタヌキの気配を感じて満足しています。人間にとって、不都合な生き物であっても、それは必死で生きていると思います。ハチ、ムカデ、ヘビ、カなど害を与えるといわれている生き物も、一般の人たちの生活に大きな迷惑をかけない範囲で、自然の中で生き残って欲しいと願っています。

無理な願いでしょうか。

